



「老人のリハビリテーション」

福井 園彦 著

最近、我が国においても、人口の高齢化が進み、この傾向は、今後益々、その速度を早め、老人人口率の増加が、各方面で話題にのぼるようになってきたことは、周知の通りです。

この期に、老人とその医学的及社会的リハビリテーションをテーマとしたこの本は、まさに適時打の感がします。

本書の内容は次の7項目から成っています。

1. 老人人口の推移
2. 老人と老化現象
3. 老人の訴えの特徴とその接し方
4. 主な老人性疾患とそのリハビリテーションの実際
5. 寝たきり老人およびその対策
6. 老人の健康管理
7. 老人の社会的リハビリテーションと老人福祉行政

などについて詳しく述べられています。

とくに、4番目の「主な老人性疾患とそのリハビリテーションの実際」の項では、老人性疾患を、循環器疾患、呼吸器疾患、運動器疾患、尿路疾患、精神障害の5つに分け、それぞれの疾患に対するリハビリテーションの実際が述べられており、我々にとって、よい参考になります。但し、対象とする疾患が非常に多く、詳細については、専門書に譲られているところもあります。後半の5, 6, 7番目の項目については、医学的リハビリテーションに従事する者だけでなく、より広く、一般家庭内で老人と接する機会のある人、又、医療行政に係る人々にも、一読に値する良書であると思います。

(医学書院刊, 1975, 3,000 円)

(東京警察病院, 理学療法士 古里正彦)

「子どもの遊びと手の労働」

子供の遊びと手の労働研究会著 (代表・寺内定夫・森下一期)

子供の手が不器用になったことが問題にされてからもう大分たつ。ナイフで鉛筆をうまく割れない、リングの皮むきができない、ヒモ結びができないなどである。手の動作のみでなく、子どもたちをキャンプにつれていったとき、子どもたちは度はずれて無能者になるという。それは、火をおこすこと、カレーライス作り、リュックや荷物の整理など一連のキャンプ生活で経験される。一方遊びの内容も、家の中で小じんまりとゲーム遊びをしたり、自動的に動く玩具が多く、工夫し努力する余地が少なくなっている。このような子どもの状況を何とかしようと、家庭、地域、園、学校などのあらゆる場で、子どもに自分の手とからだを使う遊びや労働を豊かに経験させ、“巧みな手”“考える手”を育てようという研究と運動がはじめられ、この本はその成果をまとめたものである。

手の労働という言葉が使われているが、これは、手仕事、手作業の意味で、道具や手そのものを使って行う労働

をさしている。手の労働は、作り出すべきものを頭に描き、それをよりよく作り出す為に手やからだを思いのままに動かして、道具を巧みに使ってモノの世界にいどみ、その過程で、さまざまな発見をし、工夫をめぐらし、技の向上や作品の出来ばえに喜びや感動を覚えるものであり、こうした手の労働は、子どもの豊かな発達を保障する有力な手段であるという考えが基本となっている。第1章では、子どもの手の現状がどうなっているかが、全国調査をもとに示され、第2章で、子どもの人間らしい発達にとって手の労働や道具がどんな意味を持っているかについて、第3章では、道具のしくみや使い方、子どもに与えたい道具と材料の系統について、第4, 5章で、保育園、学校などの実践報告がなされている。上述したような1つの立場から書かれているが、障害児・者をとりまく環境をどのように調整するかの問題も同様のものとして考えられる。(あすなろ書房242頁1,000円)

(東京都神経科学総合研究所 森山早苗)